

# 幹部からのメッセージ ～北から南から～

## 比治山フランス人墓地

中国運輸局長 石津 緒(はじめ)

今週は、石津中国運輸局長から皆さんへのメッセージです。



今年は日仏友好150周年ということで、観光の分野でも「日仏観光年」と位置づけられております。日仏観光年のキャンペーンのポスターには、フランスのモンサンミッシェルと並んで、地元広島の大鳥居が使われており、パリの街ではこの図柄のラッピングバスも走っているということです。4月には、フランスのガイドブック「ミシュラン」の中国地方の取材があり、来年発行される新しいガイドブックを心待ちにしているところです。

こうした中で、キャンペーンのポスターを通じて、あるイベントに参加することになりました。広島日仏協会主催の「比治山(ひじやま)フランス人墓地関係者の子孫を囲む会」というものです。

広島市には比治山という小高い丘がありますが、その南側の中腹に陸軍墓地があり、数千の帝国陸軍軍人の墓石が安置されています。墓地からは、赤レンガの旧陸軍被服廠(しょう)や瀬戸内海に浮かぶ島々を見渡すことができます。

昨年、着任間もない頃、たまたま近くを通りかかったときに、日本人将兵の墓のほかに、フランス人など外国人の墓があるのに気がつきました。



比治山から瀬戸内海を望む



フランス人兵士の墓

墓の形状も日本のものとは異なり、横に長いもので、表面に十字架や亡くなった兵士の名前などが刻まれていました。私は、以前、在仏日本大使館に勤務していたことがあるので、それ以来、これらの墓の由来が気にかかっておりました。たまたま、当運輸局の観光の担当者から、今回の交流会が日仏交流150周年記念事業として開催されることを知り、早速参加させていただきました。

今から108年前の1900年、中国で義和団の乱が勃発、欧米列強や日本など8カ国が派兵しました。その際、負傷した連合軍側のオーストリアとフランスの将兵が、日本の将兵とともに中国から広島に搬送され、当地の陸軍病院で加療されました。当時の日本政府は、「国家の体面に向け、救護すべし」と手厚い看護を指示したということです。今回の交流会は、当時、治療を受けてフランスに生還した兵士の子孫の家族と、広島で亡くなった兵士の子孫の家族が、広島を訪れ、家族の歴史や兵士らの出身地について語るというものでした。

ももとは、広島大学名誉教授の原野先生が、比治山のフランス人墓地に興味を持たれ、墓碑銘から、それぞれの出身地の市町村長に手紙を出してみたところ、戸籍などが確認され、このうち数人については子孫の所在も判明しました。原野先生は渡仏され、判明した子孫らや、さらに帰国した兵士の子孫にも面会し、今回の交流の会が実現することになったのだそうです。

亡くなったフランソワ・コエンディ兵士の子孫のジェルブ夫人は、兵士の生まれ故郷であるオーヴェルニュ地方について話されました。生還したアントナン・ジャックマン兵士の孫のシュロウカ夫人は、「明治33年に広島で治療を受けたわが祖父について」として、祖父である兵士が帰国後、結婚し、仕事に就き、どのような人生を送ったかについて話されました。広島からフランスに送った手紙も残っており、当時の日本の医療水準が高いこと、看護婦が親切なことなどを、夫人の祖母に書き送っていたそうですが、中には投函後1年以上も経って、フランスに届いたものもあるほど、郵便事情は悪かったようです。また、その女性のご子息が最近、仕事で来日し、日本人女性と結婚することになったそうです。



→「佛國(フランス)兵・殉國忠士之碑」

今回のフランス兵士の遺族の訪広については、日仏交流150周年記念特別番組「100年の時を超えて」としてTVでも報道されました。雨の中、比治山の墓地で簡素な記念式典が行われ、墓にバラの花が手向けられました。終戦の年の原子爆弾投下を経て、かつての陸軍病院は今では、石柱を残すだけとなっていますが、そこを訪れた子孫の家族の皆さんは、雨の中、跡地に佇んで、前に先祖が見たであろう同じ川の流れを見つめておられたようです。

こうして、100年以上前のフランスとの交流がよみがえりました。今回のイベントでは、来日した遺族の方々に実際にお目にかかることもでき、私にとっても感慨深いものでした。広島県はもともと、アジアからの訪日旅行者よりも欧米からの旅行者の方が多いのが特徴ですが、中でもフランス人は対前年度比50%増ということで急速に伸びており、今後がたいへん楽しみであります。これからも観光を通じて、諸外国との有意義な国際交流を深めていきたいと思えます。

---

[目次](#) [次ページ](#)